

A子さんは、いつもカップラーメンの蓋を持ち歩き、B子さんは、オロナミンCの空瓶を持っている。C男さんは、ピカチューのぬいぐるみを肌身離さず持ち歩き、D男さんは、鯉のぼりのミニチュアセットをいつもニコニコしながら振りながら歩いている。E男さんは、既存の車のおもちゃをセロテープやボール紙で改造した手製のおもちゃをいつもそばに置き、F男さんは、ご飯粒を丸めた団子状の塊（ちょっと衛生的には問題があるけど…？）を、持ち歩いている。G男さんのポケットには、ナイロン製のあかすりの糸を一本一本引っ張り出したフワフワ状のものが詰まっている。

さて、この持ち歩きグッズ、それぞれの方にとって、それぞれの人生の物語の中で、心の杖、心の支え、心の安定剤というようなものになっているであろうことは、どなたにでもお分かり頂けると思います。皆さんの中にも、肌身離せないタオルケットや捨てることができないぬいぐるみがある、そんな方がいるのではないのでしょうか？それと同じなのです。

このようなものを、児童精神分析家のウィニコットは「移行対象」と呼びました。ウィニコットによれば「移行対象」とは、『子どもの心理的安定にとって重要な価値を持つモノ（対象）・子どもに母親の愛情や優しさの代理的満足を与えてくれるモノ（対象）』として定義されています。そして移行対象の例として、ぬいぐるみ、おしゃぶり、玩具、毛布、ハンカチなどが挙げられています。

つまり、「移行対象」はモノであって、モノでないのです。人生最初の依存対象だった母親のかけがえのない代替物なのです。母親からの分離に不安を感じた時に、自立の方向に自らをカづけてくれる魔法のグッズなのです。ここで言えば、「カップラーメンの蓋」も「オロナミンCの空瓶」も「ピカチューのぬいぐるみ」も「鯉のぼり」も「改造おもちゃ」も「ご飯団子」も「フワフワあかすり」も母親の代わりなのです。ちょっと寂しい時に

そっと心を支えてくれる大切な宝物なのです。

とすると、<ゴミだから捨てなさい>、<汚いから捨てなさい>、<邪魔だから置いて来なさい>、というような係わりの言葉が不適切であることが分かります。そのような言葉は、実は「母親を捨てなさい」「母親を忘れなさい」に同義であり、果ては「一人ぼっちで頑張りなさい」と同義ということになりますから。

A子さんにとっては、カップラーメンの蓋に触れた時の、あの無機質的な皮膚感覚が安定剤になっているようです。B子さんは、時々瓶口をチューチュー吸っているのです、おそらく哺乳瓶の代わりなのでしょう。C男さんの持つぬいぐるみは、ピカチューで、ピカチューはみんなの人気者です。D男さんの鯉のぼりは、家族みんなが仲良くの意味が込められているように見えます。F男さんの心の中は、母親＝食事＝ご飯なのでしょう。G男さんは、母親の感触を求めるようにわざわざ固いあかすりから糸を紡ぎだすようにしてフワフワにしているのだと思います。

定型発達の乳幼児にとっては、0才から3才頃までの一過性である「移行対象」のあり方も、障害の重い知的障害の方々、愛着形成が遅れる自閉症スペクトラムの方々にとっては、何十年にも渡る人生の課題として、あるいは母親の死後は、また様相の違う自立のあり方を追い求める姿として「移行対象」が存在するようです。ここでは、B子さん、D男さん、F男さんの母親はもうこの世にはいません。

「移行対象」の必要な時期は、人生のステップとステップの間の踊り場の意味を持っていると考えることができます。踊り場での過ごし方の第一条件は、安心して過ごせること、そうすることで適切な支援とともに次のステップへ飛躍して行くことができます。まずは支援者が「移行対象」を本人が大切にしているのと同じように大切に、そこから本人中心の支援が始まるのです。